ズラリと並んだ小型水槽は、ほとんどがグッピーで占められている。基本的に一品種につき、一本の水槽のみで飼育・維持している

以前はベタなども飼ってたんですが、今は原点に戻ってグッピー一本です

滋賀県　藤原彦亮（よしあき）さん

MY AQUARIUM STYLE 2006

Photos／N.Hashimoto
Report／A.Yamada

愛好団体「ベストグッピー・ブリーダーズ・コミュニティ」の世話役でもある藤原さん。先月号ではドイツグッピー世界コンテストのレポートを寄稿している

藤原さんのお宅の玄関をくぐると、リビングに集中的に置かれた小型の水槽群が姿を現した。ところがなにか不思議な違和感がある。そう、水槽周りにありがちなフィルターやエアポンプの駆動音、エアレーションのボコボコといったような音がまったく聞こえず、奇妙なくらい静かなのだ。それもそのはず、すべての水槽には、フィルターも何も入っておらず、水草が浮かべてあるだけなのである。

なぜこのようなスタイルで飼育しているのかうかがってみたところ、「初めてグッピーを見た大阪のお店がこんなスタイルで飼育していたんです。こういったやり方もあるのかと驚いて、やってみることにしました。以前はスポンジフィルターをブロアで回していたんですが、音がどうしてもうるさいんでやめてしまったんです」とのこと。水質維持については、中に浮かべてあるマツモやスプライトなどの水草が調子よく育っているなら、それに任せて問題ないそうだ。むしろ、水換え時に調子を崩しやすいので、足し水には麦飯石溶液を入れるなどの気を遣っている。また、ヒーターも入っていないが、これはヨーロッパでは20℃前後の低温で飼育する方がよいと言われており、それを取り入れたものだ。高温で一気に成長させるより、低温でじっくり育てた方がグッピーにとってもいいのでは、というのが藤原さんの考えである。保温については、冬のよほど寒い日はストーブで部屋ごと暖め、夏は窓を開けっ放しにして水温の上がりすぎを抑えている。

グッピーの飼育水槽は合計40本以上あるが、基本的にひとつの水槽でひとつの品種の飼育を行ない、稚魚が産まれても特に隔離はせずそのままいっしょに育てている。つまり、単純計算で水槽の数だけ品種がいるわけだが、これだけいてもどれもしっかりと維持されていることが、藤原さんの力量を示しているのではないだろうか。中でも特にこだわっているのが、見慣れた三角尾ビレとは違う、ピンテールやラウンドテール、スピアーテール系のグッピーだ。こういったタイプのグッピーはあまり日本で見ることがないので、積極的に作っていきたいという。ただしこれらの品種は、成長に連れてやや体型が崩れやすく、また体が細いせいか仔を産みにくいのが難点だそうで、この点は今後の改良のポイントになりそうだ。

「グッピーは品種改良がしやすくて、自分だけのオリジナルを作ることができる。それに、簡単な設備で飼うことができる点もいいですね」とおっしゃる藤原さん。今後どういった品種を我々に見せてくれるのか、楽しみである。

右上：現在制作中のスピアーレッド。スピアー系のメスにフルレッドのオスをかけて作出した。赤みをもう少し乗せたいそうだ
左上：これも狙っている最中の、フルプラチナのスピアーテール
右下：エンドラーズライブベアラーは何世代も維持している
左下：フルプラチナから出現した、体が青い個体。メタリックブルーが鮮烈だ

最近飼育しはじめた、ミナミヌマエビのゴールデンタイプ。繁殖させると、青い個体が出ることもあるそう

ドイツのショップで見つけた、ホワイトパールという名のエビ。詳細は不明だが、飼育されている4匹では体色、ラインなどに個体差が見られる

水質維持は水草の浄化作用に任せ、無ろ過、無保温で飼育しているのも特徴だ。ヨーロッパにヒントを得て、水温も夏をのぞいてはやや低めにしている